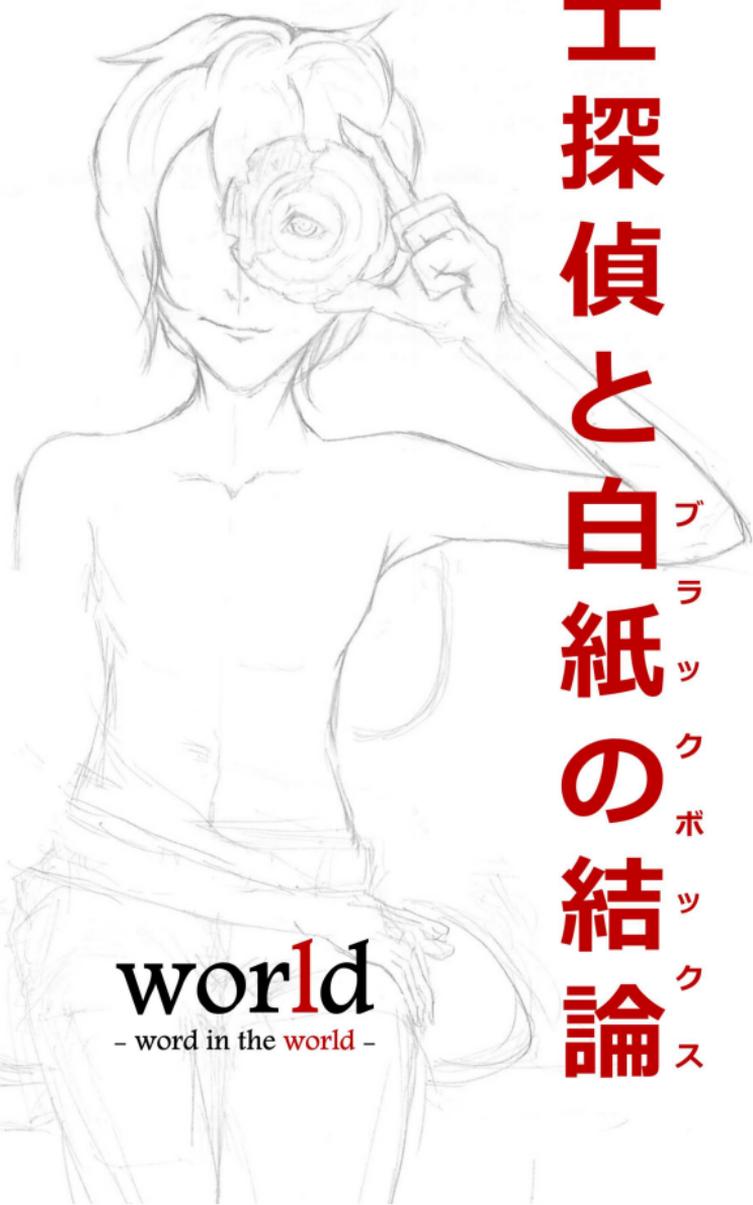


UJINASHI YUNA

氏無有名

博士探偵と白紙の結論

ブ  
ラ  
ッ  
ク  
ボ  
ッ  
ク  
ス



world

- word in the world -

# 博士探偵と白紙の結論

-はくしたんていとブラックボックス-

ver. 0.1

氏無有名

## 目次

〇〇〇 :

〇〇一 : ●●●●●

〇〇二 : ●●●●●

〇〇三 : 体の本人

〇〇四 : ●●●●●

〇〇五 : ●●●●●

〇〇六 : Up Set the Set Up

## 登場人物

●●●●：教授

●●●●：准教授

ふたみ ひろ  
双見恢：大学院生（D4）

どうたぬき ようこ  
同田貴耀子：大学生（B4）

えんどう おわり  
遠藤尾張：大学生（B4）

てづか  
手塚●●：大学生（B4）

●●●●：大学院生（M2）

●●●●：●●●●

●●●●：●●●●

●●●●：●●●●

おしかべまさよし  
刑部正義：警部

うつぎみのり  
稔稔：喫茶《オルタナティブ代理店》の店主

平等に不平等で。

公平に不公平で。

誠実に不誠実で。

条理に不条理で。

あるというだけで。

世界はこんなにも平等で公平で誠実で条理に溢れている。

子どもですらその言葉の意味を知り、大人になればその言葉の重みを知る。せめて不平等に不平等で、不公平に不公平で、不誠実に不誠実で、不条理に不条理で——世界が不平等で不公平で不誠実で不条理に溢れていたなら、どれほど良かったかと。

しかしそんな中、こんな世の中で、あの子はその言葉の意味も重みも知ったうえで、それでもしたり顔でこんなふうに言うのだろう。

そう言いたげな面持ち。それが、博士探偵と呼ばれるあの子と初めて会った際の第一印象だった。

「それでもそれはそれでこの世界は素晴らしいところだとも思いますよ」  
それでも同時に、あの子はそんなことをきつと言う。

「この世界は——人は——不平等で不公平で不誠実で不条理に始まっているのだから。だって、自分が自分の人生の主人公だと信じて疑いませんよね？」

チョコオールドフアッションを皿に準備した状態で、珈琲を片手に、そんなふうに、問いかけるように、耳を傾けるように、そして自問自答をさせるように、あの子は問うだろう。

誰かに。

そして自分に。

「誰もが皆、自分の人生に対し主体であることを通り越して主人公であることを欲してしまふ。でも、公を支配する主人——《主人公》という概念こそ、まさに不平等で不公平で不誠実で不条理の体現者……ボクにはそんなふうに思えてしまうんです」

例えば結婚式の主人公は花嫁ではないし、アナタの人生においてすらアナタは主人公ではない——主体であっても主人公ではないと、そう主張する。

「ホームズに対するワトソン然り、ハムレットに対するホレイシヨ——然り、所謂主人公がいたら、その人物を立てるために他の登場人物はお膳立てしなければならぬ——尊厳なんて微塵無く、その主人公のためだけに人格や存在を消費される。陵辱と言ってさえないや、やはり消費ということばの方が正鵠を得ているか。いずれにせよ、良いものも得るものも一グラムたりともない」

無意識に無自覚にそんなことを息を吸うようにできてしまえる人間は、恐ろしいを通り越して悍ましい。と、あの子は砂糖やガムシロップの代わりにそう加えた。

「例えばPS2に『ボクと魔王』というRPGがあつたんですけど、知ってますか？

知っていれば重量です。ざっくり説明すると、彼の主人公は無個性の無主張、どころかある程度ゲームを進行させると、主要人物も不要人物もサブキャラもモブキャラも関係なく、そのあまりの影の薄さに主人公は世界中からシカトされる」

……ちなみにボクは、どうしていいか分からず一度そこで詰みました。

「でもさ、そんな身も蓋もないというか『自分自身』が無い主人公だけさ、それ以外の登場人物はみんな、主要人物はもちろんどうでもいい人物まで小気味良いほどに個性的なんです。主人公はおよそ『人物』ですらなく、他の登場人物はどんな人物か——それを見る『視点』でしかないから」

「ここでもし「私は、私だけに見える世界をみんなに見せるための機械だ——主人公は皆ジガ・ベルトフのようであるべきと？」なんて返そうものなら、

「いいえ」

そう三文字で否定する——笑って。

「物語の話だけに話は飛ぶんだけどさ、どうして世の中から悪が無くならないと思う、絶対的に定義できるものではないから？ 世界の半分は正義でもう半分は悪だから？ 違い

ますよ。皆々様が皆々様、自身の人生において自分で自分のことを主人公だと思ってるからだ。みんなして主人公を主張し、みんなしてお膳立て求めてれば、そら尊厳なんて奪い合いだしいいじめも無くならない」

加えて。

「加えて、一人称語りの小説を書く作家なんてのは、蜻蛉かげろう以下の何かだよ」

アルネ・ヤコブセンのエッグチェアに座るあの子は、いけしやあしやあと言った。

「人間は左に一つ、右に一つ、合わせて二つ、眼を持つている。だのに一つの視点からしか物事を見ていない、見ようとすらしていないのだから、せっかくの目も無駄の限りを尽くしている駄目人間だ」

まるで正弦波のように、床につけた足で右へ左へ、正面を向きながら左右に椅子を小刻みに回す。

「自己中心的なんてのは可愛いもんです」

毒吐くような独白も、あの子にとっては愛情表現の一つである。この世界のどこかにいる誰かへの、誰かという名の全体への、実体的対象をもたない博愛という名の酷薄な愛情。

「中心であるということは、謂わば所詮自己が全体に対する部分集合でしかないがゆえになせる技ですから。自己以外にも集合——他者がいるという、他者が在ることへの許容、それなくして自己中心的にはなれない」

自己中は他者の存在を前提にできる優しい人間にしかできません。そう、あの子は言う。「対して、自分自身がその全て、他者を認めずただ己だけが全体集合と化した人間の始末の悪さといったら……」

あの子はいつも珈琲には何も入れない。曰く、何を入れてどう飲むのが美味しいのか分からず、あれこれ悩んでいたら悩むことが面倒くさくなつたから、だからそのまま飲んでいだけ。そんなブラック珈琲はテーブルに置かれたまままだ口に入れていないまま、あの子はその始末の悪さに苦い表情を浮かべて見せた。

「他者の排絶、他者を《殺す》ということとは、自分自身も同時に殺すと言うことだ」

肉体は魂の牢獄だとプラトンは言つたらしいが、この場合、中に捕らえておくべき魂すら霧散した、死骸ですらないただの形骸。他者を殺すことで至るのは、孤独ではなく虚空。「マイケルサンデル教授は、ブレーキが壊れ進路の切り替えしできない状況、そのうえ路線の上の作業員を流れのまま三人人を轢き殺すか、意思を持って切り替え、切り替え先の作業員一人を轢き殺すか、そんな思考ゲームをもって善悪を問うている。ここには自分の意思で殺すか否かという視点の他に、一人と三人の命の選択——つまりは命一つ分の価値は等価だという視点が含まれている」

愚痴をこぼすようにため息を溢す。あるいは意気を落とす。

「……『幽遊白書』読んだことある？ あれに、人ひとり分の命と引き替えに願いを叶えるという、まさに悪魔のような道具が出てくるんだけど、主人公達はそれを二人で使うことで、互いに二分の一ずつ命を差し出すことで、両者とも生きながらに願いを叶えるという機転を利かせるんだ」

予め準備されたチヨコオールドファッションを片手に、それを右眼の前に出す。

「ここから得るべき教訓は、全ての命が等しく等価ならば、十人を殺した殺人者に対し、十人分の命を費やしてたかだか一人分の命を死刑に処すべきではないし、二人組の共犯で一人を殺した殺人者達を、一人分の命で二人分の命を死刑に処することもまた、命を不平等に扱う所業だっことさ」

その軽薄で薄情に浮かべられた不敵な笑みと、巖いかりつく情に厚い素敵な笑みに、それでもあの子がこの世界を見限れずにいるのだと思えてしまうのは、きつと、左眼下にえくぼが浮かんだからだろう。

あの子はそうやって生きています。こんな、息苦しさなんて比類しない生き苦しいくそつたれな世界でも。必死にならなければ生きることすら敵わず、そうまでして生きて、ただの一つも叶わない世界でも。

もしこの世界に主人公がいたなら、それはきつとあの子だ。

でもあの子はきつとそれを望まない。

だからもし、それでも誰かが《主人公》面しなければならぬというのなら、その役を役目をワタシが負わなければならぬ。

ワタシの色褪せた毎日を変えてくれた——わけでもなく。変えてしまおうなんて全くの別物塗りつぶしたりせず。ただ、この冬の寒空みたいな同じようなただ繰り返すだけだったワタシの毎日を、それが、それでも、尊いのだと教えてくれたあの子のためなら——

「そろそろボクが何を言いたいか分かった？」

あの子はドーナツの穴ごしに何かを覗き見ているのか、あるいはドーナツの穴そのものを見ているのか——

「キミにはいったい、何がどう見えている？」

あの子の大きくにやけた口は、横幅のあるそのドーナツのために用意されたそれだった。

## 【奥付】

### 博士探偵と白紙の結論

版数 : ver. 0.1

発行日 : 2018 年 6 月 5 日 ver. 0.1 発刊

著者 : 氏無有名

発行者 : word in the world

連絡先 : [ujinashiyuna@gmail.com](mailto:ujinashiyuna@gmail.com)

URL : <http://w-in-w.wix.com/word-in-the-world>

© word in the world. All Rights Reserved.